

VoiceXML和訳グループの活動

2002年5月30日

ドコモ・システムズ株式会社

大野邦夫

目的

- コンソーシアム活動は規格を作って初めて価値がある
 - 仕様の日本語化によるVoiceXMLの普及
 - VoiceXML関連業界の活性化
 - JIS化(JIS/TR:技術情報)を通じて公的な事業活動に認知してもらう
 - 活動を通じた参加者同士の人的な交流とスキルの向上

当初の目標

- 2001.6 方針説明
- 2001.7 グループ発足
- 2001.9 下訳完了
- 2001.11 日本規格協会へ提案
- 2001.12 JIS/TR案完成
- 2002.3 経済産業省の部会で審議
- 2002.5 JIS/TR制定公開

現状の成果

- VoiceXML1.0の和訳は完成したが、当初の予定とおりにには進まなかった。

問題1

- VoiceXML 2.0の進展

- VoiceXML 1.0はすでに陳腐化しつつあり、最新の2.0にすべきであるという意見が強まる。
- しかし、VoiceXML 2.0は、ドラフトのままです正式版が固まらない。
- 当面は、V1.0の完成度を上げるべくレビューを行う。

問題2

- レビューが進展しない。
 - 毎月1回の定例ミーティングでレビューを行うがなかなか進まない(翻訳スキル、訳語の問題)
 - 毎回の参加者が少人数で、しかも大手企業のメンバーに限られてくる(技術者の熱意と余力の無さ)
 - スケジュールの目処が立たず、専門のテクニカルライターに委託することとする。

問題3

- 経済産業省の方針の変化
 - 経済産業省としては、日本発の正式規格が制定できるように注力したい。
 - そのためには、JIS/TRでなく、正式なJIS規格の制定に力を注ぎたい。
 - 翻訳JIS/TRに関しては、今後は歓迎しない。
(経済産業省としてのリソースの問題)

これまでの推移

日本規格協会との協同作業

- 2001年12月10に、日本規格協会との合同ミーティングを開催
 - XMLコンソーシアムVoiceXML和訳グループのメンバは、日本規格協会、ネットワークエージェント委員会第一分科会のSWGとなる
 - 経済産業省との調整は、日本規格協会が担当することとなる

スケジュールの再調整

- V1.0のJIS/TR化は取りやめ、V2.0に対象を変更する
 - そのために、経済産業省の部会審議を2002年9月に変更する

作業の進展

- V2.0の正式文書化の目処が立たないため、当面は、V1.0の完成度を上げる方針で進める
 - レビューのためのミーティングを設定したが、出席者が安定せず作業は進まず
 - 結局、テクニカル・ライター（イエローテイル、長谷川氏）のスキルに依存することとなる。
 - V1.0の訳は、2002.4にほぼ完成、メーリングリストで、レビューを行う。

V2.0のスケジュール

- V2.0の改定版が、逐次公開され、最新版が4月に公開される。
 - これが、公式の最終版になるかは不明
 - 少なくとも、CandidateがProposalにならないと、訳すことはできない。
- 当面、9月の経済省審議には間に合いそうもない。

著作権の問題

- V1.0の公開にあたり、VoiceXMLフォーラムとの交渉窓口がXMLコンソーシアムにおいて明確化されていない。
- そのための調整を行っている。

和訳コンテンツの概要

VoiceXML[TM] version 1.0

VoiceXML : the Voice Extensible Markup Language ,
音声処理のための拡張可能な符合付け言語

- W3C ノート 2000年5月5日
- この文書のバージョン : <http://www.w3.org/TR/2000/NOTE-voicexml-20000505>
- 最新バージョンの確認先 : <http://www.w3.org/TR/voicexml>
- 著者 : 謝辞を参照のこと
- Copyright (C) 2000 VoiceXML Forum All rights reserved.
- VoiceXML is a trademark of the VoiceXML Forum.

概要

- この文書は、VoiceXML (the Voice Extensible Markup Language : 音声処理のための拡張可能な符号付け言語) の仕様を定めるためのものである。
- VoiceXMLは、音声による対話を実現するために設計された。ここでいう対話とは、合成された音声、デジタイズされた音声、話言葉やDTMFの認識、音声の録音、テレフォニーなどを利用した双方向の会話 (mixed initiative conversations) を意味している。
- VoiceXMLの主な目的は、音声による対話を利用したアプリケーションを、Webベースのシステム開発やコンテンツ配信と同じように容易に開発できるようにすることである。

この文書の位置付け

- この文書は、VoiceXML ForumがWorld Wide Web Consortium (W3C) へ提出した文書のひとつである (Submission Request ["/Submission/2000/04/"], およびW3C Staff Comment ["/Submission/2000/04/Comment"]を参照してもらいたい)。提出した文書、および承認された文書については、Acknowledged Submissions to W3C ["/Submission"]でその一覧が参照できる。
- この文書は、W3Cでの議論に使用されることを目的として作成されたものである。従って、この文書の内容は、W3Cの会員の支持や合意を得たものではない。
- ここで取り組んでいる課題に対して、W3Cが現在までになんらかの資源を割り当てたことはなく、将来資源を割り当てることを保証するものでもない。また、この文書に関連する作業は現在進行中である。
- そのため、この文書は改訂されたり、置き換えられたり、あるいは他の文書が作成されることによって使用されなくなったりする可能性もある。

VoiceXML Forumについて

- VoiceXML Forumは、AT&T、IBM、Lucent、およびMotorolaによって創設された産業界の組織である。この組織は、インターネットのコンテンツや情報を音声と電話を使って利用するために設計された新しいコンピュータ言語、VoiceXMLの発展と普及を目的としている。
- 創設にかかわった4つの世界規模の企業の後援と技術的な貢献、およびインターネット産業をリードする様々な人々の支援によって、VoiceXML Forumはインターネット上で音声を利用したアプリケーションを開発することを可能にした。

実装範囲

- VoiceXML 1.0は、音声を利用したテレフォニーアプリケーションの開発のために設計された。
- 特定のアプリケーションがバージョン1.0のすべての機能を必要としない場合は、例外事項を明確にして、それをVoiceXML 1.0のサブセットとして文書で公開することが望ましい。
- 同様に、ベンダーによる独自の機能拡張や変更も、それがVoiceXML1.0の私的な拡張であることを明示されることが望ましい。
- ただし、VoiceXML Forumは、そういった変更に対して、将来の互換性を支援したり、保証したりすることはない。

改訂履歴

バージョン /日付/ 説明

0.9 /1999年8月17日/ 初公開版（支援者からコメントを得るためのたたき台として提供された）

1.0RC /2000年3月2日/ 最終検討版（フォーラム支援者に対して公開された）

1.0 /2000年3月7日/ 一般公開版（1.0RCに編集上の修正を加えたももの）

目次

- 1. はじめに
- 2. 背景
- 3. コンセプト
- 4. VoiceXMLの要素
- 5. 文書の構造とその実行
- 6. フォーム (Forms)
- 7. メニュー (Menus)
- 8. リンク (Links)
- 9. 変数と式
- 10. 文法
- 11. イベントの取り扱い
- 12. リソースフェッチング (Resource Fetching)
- 13. プロンプト (Prompt)
- 14. フォーム項目 (Form Items)
- 15. フィルド (Filled)
- 16. メタ (Meta)
- 17. プロパティ (Property)
- 18. パラメータ (Param)
- 19. 実行可能コンテンツ
- 20. 時間の指示
 - A. 用語解説
 - B. VoiceXML文書のDTD
 - C. フォーム解釈アルゴリズム
 - D. VoiceXML文法の形式としてのJSGF
 - E. 推奨されるオーディオファイルの形式
 - F. タイミング特性
 - G. 拡張案：トランスクリプト [Transcribe] 附属書
 - H. 謝辞

翻訳文例

- この文書では、VoiceXML (the Voice Extensible Markup Language: 音声処理のための拡張可能な符号付け言語) を紹介している。VoiceXMLは、合成音声、デジタイズされた音声、話言葉やDTMFキーの認識、入力された音声の録音、テレフォニーなどを様々に組み合わせて、音声による対話を実現するために設計されたものである。VoiceXMLは、webを利用したシステム開発やコンテンツ配信の利点を、対話型の音声応答アプリケーションの開発にもたらすことを第一の目的としている。
- VoiceXMLの小さな2つの例を見てみよう。まず最初の例は、いわゆる「Hello World」である。
- `<?xml version="1.0"?>`
- `<vxml version="1.0">`
- `<form>`
- `<block>Hello World!</block>`
- `</form>`
- `</vxml>`

今後の方針と反省

今後の方針

- V1.0を公開したいが、VoiceXMLフォーラムとの交渉が必要。
- 和訳グループとしては、XMLコンソーシアム経由で公開したい。
- V2.0に関しては、今後の推移を見守る必要がある。
- V2.0が正式な勧告候補となった時点で、今後のスケジュールを立てる。

反省

- まともに活動が進展したのは、下訳完了まで
- それ以後のレビュー、承認、公開といったプロセスに関しては、組織的な活動は行えなかった。
 - 自主的なコンソーシアム活動の困難性
 - 企業の余力の無さ
 - 人材の余力の無さ
 - 翻訳、文書作成能力の未熟さ→専門のライターの必要性
 - 経済産業省の方針の変化
 - 日本的文書管理カルチャー
- コンソーシアム活動は規格を作って初めて価値がある